

# *The Sound and the Fury*

## 序章：『マクベス』解体

遠 山 清 子

不死鳥シェイクスピアはフォークナーのうちに甦った。フォークナーは『マクベス』を遠慮会釈なく解体し、解体したマテリアルをもって自分自身の繭を紡いだ。彼は *The Sound and the Fury* のタイトルを有名な Tomorrow Speech から採ったが、それ以上の『マクベス』との繋がりについては、特に触れた事がない。作家は不道德なもので、誰からでも、何処からでも盗む、とフォークナーは言った<sup>1)</sup>。新約、旧約の聖書を除けば、シェイクスピアから最も多く盗んだのではないだろうか。同じ頃に書かれた『死の床に横たわりて』そして『アブサロム、アブサロム!』にも、シェイクスピアの痕跡がはっきりと読みとれる。それとも、キリスト教文化圏にあって、同じ言語を分かち合うものに、シェイクスピアは現代文学の源流として、ともかくそこにあって・it's just there<sup>2)</sup> 聖書に影響されたと言う西欧の作家がいないように、シェイクスピアの言語はフォークナーの骨肉となっていて、盗んだ自覚さえないのかも知れない。

アメリカ深南部の文学青年は、恐らく註釈書に依らず、上演される『マクベス』を見ず、テキストを丁寧に読んだものと思われる。後年、つねに携行するものとしてシェイクスピア全一巻をあげている<sup>3)</sup>。戯曲のテキストは楽譜のようなものと言われるが、シェイクスピアの作品では、進行のすべてが言葉で言い表わされるので、むしろ一語一語読むことが王道ともなる。シェイクスピアの言語を自分のものとしたことは、フォークナーを大きく育てたにちがいない。

彼はまず、『マクベス』からダイアログを取り除き、全篇をモノローグで埋めた。戯曲はダイアログとモノローグですべてを収めるが、モノローグ

で通す *The Sound* も、基本的に話し言葉に依っている。一章、二章、三章は、三人による三様のモノローグから成る。モノローグの章を持たない人物の性格づけも、描写に依らず、登場人物の言葉、つまり、セリフによってなされている。異なった話者の異なった語り口・文体そのものが人物を形象化する。最終章は、前の三章と対比させる叙述の方式による。作者らしい話者があらわれ、作者の道德判断の少なくとも一側面が明らかにされる。が、話者は演説はせず、内向きに自分に向かって確かめるように語り、この章も、モノローグのように響く。いわば、全篇がモノローグで成り立っていると言ってもよい。

マクベスは傍白によって言語化される認識と、ダイアローグを含む外在化された行動をそなえたキャラクターである。一方、対話という行動的な文体を欠き、その上、描写を用いない *The Sound* 一章から三章には、キャラクターと呼べるものは存在しない。形象化された観念が人の形をとり、その‘人’は各々固有のスタイルで自分を語る。四章では、作者らしい話者によって、登場人物の外貌、行動パターンが写されるため、中心人物となるディルシィは、比較的厚く肉付けされる。が、おおむね作中人物の造型より、時間をめぐるメタフィジックの追求に主眼がおかれている。方法論の上ではアナキーな状態で、作者は前面に出ず、キャラクターもほぼ不在の物語が、クロノロジィを無視して語られる。

この様にコンベンションを無視しても、逃れようのないのは、文学のメディア・言葉の内包する制約である。音声によって肉体化されない言語には、すべての事象を抽象化する作用があるが、作者はこの腐食作用に逆らって文体を模索する。

言語の抽象化作用を極力おさえるため、抽象能力のない話者・白痴のモノローグを用いて語り始める。抽象能力を欠くものは、正常人が必ず持つ偏り―偏見―がないまま、事象をそのまま写す、いわゆる、‘たよりになる’話者となった。この話者は、コンプソン家におこった出来事を解釈を交えず写すかたわら、何かを伝えようとする。言語能力のないもののモノローグとは

矛盾しているが、これは創られた白痴である。マクベスのモノローグの中の a tale told by an idiot に想を得て、比喩を現実として実験に移したと思われる。

一章では言語能力のないベンジーが何かを伝えようと悶え、全篇は作者が、言葉を探し、文体を模索するプロセスとなる。「白痴による物語」は一章のみならず、全篇を指している。sound and fury. 言葉にならない響きをあげて滾るいのちの様を追って、フォークナーの声は、時空を隔てた読者に届いた。「白痴による物語」は signifying something 何かを伝え得たのである。

; it is a tale told by an idiot, full of sound and fury,  
signifying nothing.

これはマクベスのセリフであって、フォークナーのものではない。

ある日突然、自分とあらゆる出版社の住所、ブックリストの間が永久に遮断された。さあ、これで書ける。ローマ人が枕頭におき、縁が接吻ですり減るほど愛した壺、そんな作品を自分のために創ろう<sup>4)</sup>。こうして徹底的に自分に沈潜したことが、時空を越えた読者に訴える、普遍性の高い作品につながった。‘切手ほどの大きさしかない故郷’<sup>5)</sup> が宇宙に通じるプロセスと同様である。

ノベルは本来ゆるやかで曖昧なフォームであるが、フォークナーはそのメリットを大胆に活用した。南部の社会に定まった場を占めない Count No' Count<sup>6)</sup> 大学からも落ちこぼれた若者は、あらゆるコンベンションに懐疑の目を向ける。もし彼が正規の大学教育を受け、社会に場を得ていたならば、創作上の約束事を含む様々なコンベンションから自由になるのは難しかったであろう。この時期に傑作が集中しているのは興味深い。作家としての地位が安定するにつれて、文体上も冒険し、実験する気迫が衰え、述懐に傾くようになる。晩年になって、自分のなし遂げた業績に驚嘆している<sup>7)</sup>。個人の才能を超えて、彼の言う‘神か、神々か、そのようなもの’の器となり得たのは *The Sound* 執筆にはじまる十年間ではないだろうか。この時期、文体を模

索し、モラルの在処を探った。模索にはじまり模索に終る、方向性はあっても完結はない。後年彼は Appendix をつけて完結しようとしたが、いくつ附記を重ねても *The Sound and the Fury* は未完の作品である。完成度を基準とするならば、これは明らかに失敗作と言えよう。アンドレ・ブレカスタンも言う「素晴らしい失敗作」である<sup>8)</sup>。

一方、完成度の高い『マクベス』は戯曲というフォームに守られ、王制の枠組のなかで王侯のために書かれた。そこでは、王権の勝利は普遍的なモラルの勝利と重ねられる。正統の王権の復活は、モラルそのものの復活であり、世継の王子による勝利宣言で『マクベス』は幕が降りる。この堅固な枠組のなかで、時間と人間存在の関わりが、あくなく、フォークナーのそれより遙かに鮮やかな言語をもって追求される。試行錯誤するフォークナーの言語にくらべ、シェイクスピアの言語は常に明確な輪郭を持つ。一語一語に行動性があり、強く美しい言葉が惜しげなく一回性の花を咲かせ、花園さながらである。作者が言葉を探しあぐね、あるいは、もどかし気に言葉を重ねることは決してない。これは個人の天才とともに、二重、三重に張りめぐらされた堅固な枠組にも関わってくる。

まず、彼は戯曲という構築的なフレームを用いる。そして王侯を主とする観客を楽しませるのが彼の存在理由である。シェイクスピアには職業人の自覚はあっても、人間実存の深淵をえぐるといった意識はなかったと思われる。様々な規制のもとで、芸術家という市民権のない作者が、このように鮮やかな言語を生むのであれば、文学の歴史と社会の歴史、フォームと内容の問題をどのように捉えればよいのであろう。短歌について興味深い記事があった。万葉の昔から三十一文字を守ってきた短歌は、幾度か、否定論、滅亡論を潜り抜き、「緊迫感を強めることによって生き堪えてきた」。短歌の再生をはかる方策として「口語、現代語を生かして定型との闘いを乗り切らねばならない」と歌人田島邦彦氏は言われる<sup>9)</sup>。歌人の定型との闘い、フォークナーの言葉の腐食作用との闘い、絶対を失った現代にあって、創作の原動力は闘いなのであろうか。固有な言語の使い手が固有の人、個人であるならば、

現代の作家は、多くの自由を得た時に、かえって固有の言語・肉体的言語を失ったのではないか。

神の絶対が崩れ、あらゆる価値の相対化が進むと、作家の言葉によせる絶対的信頼も揺らぐ。フォークナーは、もはや、言葉は神である、とは断言し得ない。しかし、言語を行為に転換し、文学を役立つものとしなければならない、言葉を神に戻さねばならないという強い意志はある。ノーベル文学賞受賞の際フォークナーは、人類が耐え、ながらえるために、いのちを励ます文学を作者は書かねばならない、と作家モラリスト宣言をした<sup>10</sup>。架空の日本の美をたたえた川端康成の受賞スピーチとの隔たりは大きい。賞を受けてにわかに変わったのではなく、若い彼も、根本のところでモラリスト・道を求めるものであった。道徳的模索と文体上の模索は、ひとつの車の両輪と成っている。

シェイクスピアにとって、「はじめに言葉ありき、言葉は神とともにありき、言葉は神なりき」は問うまでもない現実である。言葉の有効性を疑うフォークナーの理想は、シェイクスピアには意識するまでもない現実となっている。『マクベス』においては、神がすべての事象に名を与えて限定し、限定されないものは神の秩序からはずされる。神の秩序に入り込めないものは、生命破壊、生命否定の方向にしか機能できない。魔女がそれである。魔女という訳は不適確だが、言葉の歴史にキリスト教の観念が絡まなかった日本語に witch, spirit などの適訳を見出すことは困難であろう。魔女は物の怪・Apparition で、地上の時空を定かに占める存在とはなり得ず、性別も定かではない。

You should be women, and yet your beard forbid me to interpret  
that you are so.

彼等の行為は名付けられない行為・a deed without name である。そして、apparition でしかない彼等には、善悪、美醜の判断を下す能力がない。Foul is fair, fair is foul と見事に言語化されるように、魔女の言語には常に道徳判断が欠落している。限定され、名付けられて、はじめて事象は‘ある’つま

り、‘然り’となって生命活動を起こす。「然り、然り、否、否と言え、余のことは悪魔より来たる」とあるように、イエス、ノーの判断のみが生命活動をおこし、これを欠く言辞は、生命否定の方向にしか機能しない。判断を欠いた認識は、たとえそれがいかように鋭く、あるいは深くとも、行為となって外在化されることがない。シェイクスピアにおいてすべての事象、すべての行為の根源にあるのは言葉である。

魔女の予言を聞き、心を動かされるのはマクベスだけではない。ただ、バンクォは魔女の言語体系に巻き込まれる手前で、辛うじて踏み止まることができる。彼は自分に向って思考の停止を命じ・Hush, no more 魔女の言葉の侵入を意志的に食い止める。その上で、また意志的に神の言語体系に戻るのだ。祈りたくとも祈れない、アーメンが喉に引っ搔かって出てこないマクベスとは対照的である。マクベスとバンクォは意志力において運命が分たれる。そして意志が中核となってバンクォの人格ができあがる。マクベスがバンクォを恐れるのは当然である。

魔女の言語の侵入を許したマクベスは、生命の秩序からはずれ、自然の時間・現在を踏みはずしていく。ダンカン王を殺害して、彼は自然の恵み、安らかな眠り、そして会食の楽しみを奪われる。Macbeth does murder sleep—Macbeth shall sleep no more—残るのは身に沿わない王者の衣服・barrowed robe のみだ。<sup>いさまもの</sup>生物の今日は、寝る、食べるといった日常茶飯事そのものに支えられている。王者とても生物である。眠りを奪われるとは、今日の可能性を奪われるに他ならない。人の肉体をとりまく自然の時間は常に現在で、人の一生は現在という時間の集積である。王となる日、明日に心を奪われて、現在を限りなく破壊していくマクベスの生は、空転するしかない。世界の関節は魔女の語彙の侵入を許した瞬間からはずれだす。

To-morrow, and to-morrow, and to-morrow,  
Creeps in this petty pace from day to day  
To the last syllable of recorded time,  
And all our yesterdays have lighted fools

The way to dusty death. Out, out, brief candle!  
Life's but a walking shadow, a poor player,  
That struts and frets his hour upon the stage,  
And then is heard no more; it is a tale  
Told by an idiot, full of sound and fury,  
Signifying nothing.

明日、王朝を築くため、今日を生き損ねたマクベスの生は、意味をなさない白痴の話と同然になる。フォークナーは、解体したマクベスの生を更に a walking shadow, a poor player そして an idiot の三様の歪んだ時間に分解し、各々一章をあてる。時間との取り組みようの違いは、そのまま異なった認識のあり様、つまり、三様のモノログとなる。マクベスの砕け散る内面、内的生命の破片が、クエンティン、ジェイソン、ベンジィの三人の意識の流れ、モノログとなる。

ベンジィ・セクション：一章は文字どおり a tale told by an idiot・白痴の話である。ベンジィには時間の流れを認識する能力が与えられていない。彼の時間は、こま切れの現在でなりたっていて、いい変えれば、可能性を含まない現在に永遠に封じ込められている。作者は、この話者にコンプソン一家の歴史の大枠をクロノロジィを無視して語らせる。

クエンティン・セクション：クエンティンがすべての事象を観念化している間に時は流れ去り、彼は肉体をとり巻く現在に常に対処し損ねる。彼の生は決して行動となって顕現せず、歩く影・a walking shadow にしかならない。その自殺は自然死である。

ジェイソン・セクション：ジェイソンは瞬時も気を休めず、苛々と駆けまわる。時間の流れと競争して自己主張し、その場その場の達成感を求めて空転し続ける。舞台にいる間中むなしく駆けまわる大根役者・a poor player, that struts and frets his hour upon the stage で、クエンティン同様に存在感のない、儚い生物である・And then is heard no more.

そして終章は、刻々の要請に答え続け、耐えるディルシィを、はじめて外

側から、三人称をもって描く。認識によらず行為によって現在の時間を埋めつくし、外在化された行為が即彼女であるから、外側からの描写が最適で、また、それで事足りる。この終章で作者のモラリスティックな側面が垣間見られる。冒頭から *regal, moribund, courage, fortitude, indomitable, somnolent, impervious* といった肯定的な big word を畳みこみ、他者に与える行為で時を埋めつくすディルシィを描く。

なぜディルシィにはそれが可能か、も、間接的に示唆される。彼女は、現在を永遠を含む広い視野のうちに収め、それによって現在の要請を的確に把握することができる。現在に振りまわされず、永遠のパースペクティブのうちに、刻々の要請を受けとめ、耐える。寝かせる、食べさせる、着せるといった日常の行為—それは愛の実践に他ならないのだが—の集大成が彼女である。サルトルはクエンティン・セクションにフォークナーのメタフィジックがあると誤認したが、作者はディルシィを通して彼のメタフィジックを打ち出す。神を信じるとは、知覚世界を超えるパースペクティブのうちに現在を捉え、現在の可能性に賭ける決意に他ならない。

There is only the present moment, in which I include both the past and the future, and that is eternity.<sup>11)</sup>

永遠とは現在の別の名であるという形而上学を分かち合っても、神を信じるという人・クリスチャンについての概念は、フォークナーに至ると崩壊する。危機感を失い、自己満足に陥ったクリスチャンを描く時、フォークナーは、アレルギー症状を起す。ここから、彼は反キリスト教だという論議も興る。彼自身クリスチャンであると言ったり、韜晦したりしている。結婚後は教会に行っていたともいうが<sup>12)</sup>、作品を読むかぎり、制度的なキリスト教への反感、あるいは懐疑の方が表面に出ている。はっきりと肯定的に描かれているクリスチャンはディルシィのみと言ってよい。

もし、キリスト教の理念に基づいて建てられたインスティテューションとそのコミュニティ、に疑いをもたず属することがクリスチャンの条件であるならば、彼はクリスチャンとは言えないかもしれない。ヨハネ伝を手掛りに



『八月の光』を解明したヴァージニア・ラブサは、フォークナーは彼自身の信仰に普遍性を与えよう、市民権を与えようとしていると言う<sup>13)</sup>。人という生物は、ある一定の時間・空間に偶然生み落とされ、その苛酷な今日に対応することしか許されない。流れて止まぬ時間の中で、空中分解から身を守るためには、知覚世界を超える視野が必要になる。神があるかないかは定かでないが、神を求めざるを得ない人間の悲惨・ミゼリィがあることは疑いもない。人が神を存在せしめる。

次に、信仰と人のつくる制度との相関関係が問題になる。多くの人は、自分に振り当てられた時空にもともとある宗教を選ぶ。あるいは、属するか、反抗するかを選ぶ。宗教が制度としての圧力を持たない場合、例えば日本では、封建制、天皇制の理念がこれにあたる。徳川家康は東照大権現として祭られ、天皇も神格化されるところからも、制度も一種の宗教、あるいは宗教的理念となることがわかる。

すべての宗教は定着した段階で組織化され、組織そのものの守り手を生む。そして、宗教とその制度が拮抗関係を失えば、直ちに権力構造になっていく。親鸞は、弟子も寺も持たない、あるは同行のみ、と信仰におけるハイアラーキの一切を否定した。だが、彼の没後、宗門が世襲となった時点で、はやくも理想は弊えた。この人を開祖とする浄土真宗は、現在巨大なハイアラーキとなり、東本願寺派、西本願寺派に分裂し、抗争をくり返している。グレアム・グリーンは異分子に対して比較的寛容なカトリックに改宗し、英国を出た。そして、生国を捨て、カソリシズムを選びとっても、‘はぐれ’の姿勢を終生崩さなかった。何の群であっても、構成員となりければ、個に立脚する作家の自己否定に繋がるという判断があったと思われる。フォークナーは制度的なプロテスタンティズム、特にカルヴィニズムが、社会の隅々までいき渡った彼の故郷に根をおろし、愛し、憎む道を選んだ。グリーンもフォークナーも孤独な闘いを闘ったが、フォークナーの選んだ道の方が陰しかったかもしれない。世界的に知られたあと、最後に彼を認めたのは故郷の人達であった。制度の構成員が、帰属意識の強化を求める時、異分子退治・

魔女狩りがはじまる。救われようのない毀れものの自覚を失った信仰者は、異分子を裁きはじめ、キリストを礎にした人々と重なってくる。フォークナーは『八月の光』で、自己の正当化を急ぐあまり、人殺しに変容していくクリスチャンの群を描いた。

エリザベス朝の語彙には、政教分離という観念すなわち言葉すらなかったと思われる。キリスト教国・Christendomのみが正当の国家で、王は国を治めるに止まらず、病を癒す権能も与えられている。王権への抵抗は、神を恐れぬ仕業となり、個人の徳 virtue は、制度内の秩序に従ってのみ容認される。バンクォが In the great hand of God I stand という時、神の御心とは、王権と王を頂点とする制度の順守である。なぜなら善い王は臣下の慈父であり、秩序を保ち調和のとれたコミュニティの中心にいる。王が臣下を育むもの・自然の力と同一視されていることは、ダンカンの言葉からもうかがえる。育てる、贈るといった言葉が多く、支配するより育てる王であることが強調される。

I have begun to plant thee, and will labour

To make thee full of growing.

マクベスはダンカン王を殺害して、調和のとれた自然を傷つけた。シェイクスピアはまことにエリザベス朝の生んだ作家ではある。

フォークナーは、あらゆる制度に懐疑の目を向ける。最小単位のインスティチューション・家庭もこの目を逃れることはない。とすると、希望を托し得る対象は女性のみとなる。永遠に手の届かない、男性の心のなかに憧れとしてあり、現実には不在の女性である。与えつくし、許しぬくもの、いわば、人の形をした愛そのもの、を二人の女性—フォークナーのマルタとマリア—に造型した。シェイクスピアが王権に希望を託して、彼と彼の時代の限界を示したように、フォークナーは、愛の担い手を女性に特定することで、彼と彼の時代の限界を暴露する。彼のマルタとマリアは、男性中心にできあがった社会で男性が求め、男性が憧れる女性である。この手の女性崇拜には、確かに苛立たしいものがある。だが、すべての個人は、特定の時間、空間、

そして特定の性の虜であり、いわば、様々な限界の総体でもある。限界をもってある作者を全否定する材料にすることはできない。限界があるか、ないかより、限界を超えて、普遍に至るか否かが問題である。シェイクスピアもフォークナーも、各々限界をもっているにもかかわらず、いや、もっているからこそ、時空の隔たりを超えて訴える力をもつ。

フォークナーは、女性に夢を託すロマンティストの系列の最後を飾る作家ではなかろうか。彼の言葉をそのまま受けとれば、梨の木に登った勇ましい少女のイメージ、に著作を触発されたという<sup>14)</sup>。キャディは真実を見極める勇気と、見返りを求めずに愛する能力を備えていて、彼女の存在と不在が三人の兄弟、クエンティン、ジェイソン、ベンジの今日を形づくる。だが、人は夢を食う生物であるとしても、現実の日常の支え手があって、はじめて夢みることが可能となる。キャディの不在を各々のかたちで託つコンプソン家の人々を、日常的に支えるのはディルシである。ディルシはまさに召使―他者の日常の暮らし、食べる、寝る、着るなどの面倒を見るもの―であり、加えて、使用人と母親の機能を兼ねそなえる乳母である。キャディは、永遠に捉え難いエロス、ディルシは、意志の力で可能になるエトスを人のかたちになぞらえた。エロスの不在を描き終った時点で、「何かが足りない」と感じ、エトスを奨揚する最終章を書き加えた。エロスとエトスのあわいに揺れる作者は、完き愛・アガペーを思わずにはいられない。

マクベスの影を際立たせる光は、神に守られた王であるが、フォークナーの希望は、夢を与える女と日常を支える女に担われる。いのちを育てるものが、王から、木のかおりのする少女と黒人の乳母に分散されたとき、『マクベス』を貫く男らしさ・manlinessの観念も解体する。ちなみに、manが人類を意味して使われているのは『マクベス』中一箇所、妻子を虐殺されたマクダフのセリフ、であるという。内面と外面が分裂していくマクベスを束ね、行動におもむかせるのは、男らしさの美学である。男らしさは武勇・戦闘能力のようだ。この美学に支えられて行動する時、マクベスは、まぎれもない人殺しとなる。マクベスは登場前に、武勇優れたもの・valor's minionと紹

介される。また、ためらうマクベスを、ダンカン王殺害に踏み切らせるのは、男らしくない、と言うマクベス夫人の一言である。追いつめられて、最後まで闘い抜く決意も、この美学に支えられている。殺すか、殺されるか、いずれにしても、戦闘能力を基準に称えられ、罵られる。つまり、戦闘力としての男らしさの概念が劇の起承転結を決めていく。

フォークナーに至ると、男らしさの原理も崩壊するが、形を変えて受け継がれる。クエンティンもジェイソンも、各々、男らしさにこだわる。クエンティンは、すべてを概念化し、抽象化する点で、非常に男性的である。この意味で男性的であるが故に、抽象化される以前の現実、すなわち自然の時間、に行動をもって関わるができない。行動力を欠き、攻撃的な雄<sup>おす</sup>たりえない彼は、ロマンチックな男性の役割・騎士あるいは紳士を演じようとする。婦人の名誉を守るためには、命をかける役割である。身だしなみ、礼儀も、男らしさの欠くことのできない側面となる。

ジェイソンは、資本主義競争社会における男らしさに憑かれている。彼が飽くなく追い求めるのは、金そのものよりも、金が象徴する力である。そして、すべての事象・太陽から時間に至るまでが彼の隙をうかがう敵となり、人は敵か、管理すべきものに分類され、弱いものは自分の力を確認するために、常に攻撃の対象となる。

ベンジの叫びは、個別性を突きぬけて人類の言葉にならない悲惨を響かせる。

the grave hopeless sound of all voiceless misery under the sun.  
男性を失い、彼だけは性別を出て、人間としての The man となるかに思える。しかし、個別性と固有の性は人間の条件であるから、個別性を失い、言語能力を欠くものは The man にはなり得ない。個別性、言いかえれば固有の限界、を持たないものは、抽象的で実体のない、人の類となるに止まる。

さて、フォークナー研究は、今日、意味があるのかという声を時々きく。女性を軽視し、あるいは蔑視の裏返しとして崇拝のかたちをとり、ネイティブ・アメリカンから奪い、ブラックやマイノリティを抑圧してきた白人男

性・ワスプによる文学の研究は意味があるのかという問である。これは、作者も読者も種族として捉える悪しき循環のなかで発せられた問ではないだろうか。文学の市場を白人男性が独占していた状況より、現在の多様性は望ましい現象と思う。その意味では、フェミニストから聞える男性ワスプ作家研究無用論は、揚がるべくして揚った声である。しかし、新しいグループを歓迎するために、古いグループは排除しなければならないという論理は国家主義に似ている。いつの時代も社会のマージナルな階層から緊張度の高い文学が生まれる。シェイクスピアはエリザベス朝の周辺の人、いわば河原乞食、であったし、*The Sound and the Fury* を書いた頃のフォークナーも、地域社会のアウトサイダーであった。中南米の文学はいまや北米のそれを凌ぐ勢いを見せ、近くは、在日韓国人作家の間から密度の濃い作品が続出している。文学の読者、研究者の対象はあくまで最終的テキストであって、作者の属性は作品を成立させるファクターに過ぎない。作者も読者も、各々の属性、限界の総体としての個人である。

外国文学の研究は、輸入、紹介という道筋を避けて通れない。問題となるのは、個々の研究が、固有の視点を持っているか否かである。金関寿夫氏は、日本にネイティヴ・アメリカンの文学を紹介する口火を切られた。『魔法としての言葉 アメリカン・インディアンの口承詩』は、金関氏自身の言葉のいのちについての考察に裏打ちされた、紹介がそのまま発信行為となった例である。一方、制度化された宗教に圧迫されてきた方面からの反キリスト教の声を、そのまま日本の読者のものとする傾向には疑問を抱かせられる。ひとりひとりを掛替えのない個人とみなす思想は、日本にあっては、むしろ抵抗の論理・拠りどころとなり得る。研究者が置かれている空間の現実、外国文学を紹介するにあたっては、捨象されるべきではない。

フォークナーをいち早く受入れたのは、実存主義哲学が全盛を極めていた頃のフランス人読者である。ジャン・ポール・サルトルの *The Sound and the Fury* 評は、現在に至っても鋭角を失っていない。今日もフランスの研究者達は血のかよったフォークナー論を多く生み出している。例えばアンド

レ・ブレカスタンは、二様の文化、二つの言語の<sup>はざま</sup>迫間、アルザス地方の人で、その立場が、切り口の鋭い、屈折に富む評論に反映している。創作行為が“Kilroy was here”と忘却に存在の引っ掻き傷を残すためになされるならば<sup>15)</sup>、固有の現場にある読者も、その生きる証をフォークナー研究に探りたいと思う。『八月の光』を執筆中、*The Sound and the Fury*を書いた頃の喜びはもうなかった、本を読みすぎ、作家商売に通じすぎたせいだ、とフォークナーは回顧する<sup>16)</sup>。彼を論ずるものも作者と一対一で向い合う読者のよろこびを今一度取り戻すべきではなかろうか。

### Note

- 1) *Faulkner in the University: Class Conferences at the University of Virginia, 1957-1958*, ed. Frederick L. Gwynn and Joseph L. Blotner (Charlottesville: University Press of Virginia 1959) p. 20-21.
- 2) *Faulkner in the University* p. 86.
- 3) 'Colloquies at Nagano Seminar' in *Lion in the Garden: Interviews with William Faulkner* ed. James Meriwether and Michael Millgate (University of Nebraska Press 1968) p. 110.
- 4) 'Introduction to *The Sound and the Fury*, 1933', in *William Faulkner's The Sound and the Fury: A Critical Casebook*, ed. André Bleikasten (Garland Publishing, Inc. 1982) p. 10.
- 5) 'An Interview' in *William Faulkner's Three Decades of Criticism*, ed. Frederick Hoffman and Olga W. Vickery (Michigan State University Press: 1960) p. 82.
- 6) 無名のフォークナーは故郷の人々に嘲けられた。
- 7) *Selected Letters of William Faulkner* ed. Joseph Blotner (Random House: 1977) p. 348.
- 8) André Bleikasten, *The Most Splendid Failure: Faulkner's The Sound and the Fury* (Indiana University Press 1976) フォークナー自身の言葉をタイトルにした。
- 9) 朝日新聞 1993/09/19 短歌時評
- 10) 'The Stockholm Address' in *William Faulkner's Three Decades of Criticism* p. 348.
- 11) 'Interview with Loïc Bouvard' in *Lion in the Garden*, p. 70
- 12) Charles Reagan Wilson, 'William Faulkner and the Southern Religious Culture' in *Faulkner and Religion* ed. Doreen Fawler and Ann J. Abadie (University Press of Mississippi 1991) p. 26-27.
- 13) Virginia V. James Hlavsa, *Faulkner and the Thoroughly Modern Novel* (The University Press of Virginia 1991).
- 14) *Faulkner in the University* p. 1.

- 15) 'Interview with Jean Stein Vanden Heuvel' in *Lion in the Garden* p. 252.
- 16) Introduction to *The Sound and the Fury*, 1933, p. 9.

#### シェイクスピア参考文献

- William Shakespeare, *Macbeth*, Introduction and notes by Masaaki Imanishi (Taishukan Publishing: Tokyo 1987).
- Macbeth; Major Critical Characters*, ed. Harold Bloom (Chelsea House Publishers: New York 1991).
- Macbeth; Critical Essays*, ed. S. Schoenbaum (Garland Publishing: New York and London 1992).
- Macbeth; Contemporary Critical Essays*, ed. Alan Sinfield (Macmillan Education: London 1992).
- William Shakespeare's Macbeth; Modern Critical Interpretations*, ed. Harold Bloom (Chelsea House Publishers: New York 1987).
- S. S. Hussey, *The Literary Language of Shakespeare* (Longman Inc.: New York 1982).
- Michael Long, *Macbeth: Harvest New Critical Introduction to Shakespeare* (Harvester Wheatsheaf: Great Britain 1989).
- John Porter Houston, *Shakesperean Sentences: A Study in Style and Syntax* (Louisiana University Press: Baton Rouge and London 1988).
- James C. Bulman, *The Heroic Idiom of Shakesperean Tragedy* (University of Delaware Press 1985).
- Nicholas Grene, *Shakespeare's Tragic Imagination* (Macmillan: London 1992).